

Eberhard Gwinner (1938-2004) を偲んで

海老原 史樹文

名古屋大学・大学院生命農学研究科・応用分子生命科学専攻・
バイオモデリング講座・動物行動統御学研究分野

昨年9月7日マックスプランク鳥類研究所のEberhard Gwinner教授が逝去された。あまりにも突然の悲報で、我々の研究室を含めて彼を知る多くの関係者は強い衝撃を受けた。札幌シンポジウムを始めとして幾度となく日本を訪れ、日本の時間生物学発展に多大な影響を与え続けたGwinner教授（以後親しみを込めてEboと表記する）に謹んで哀悼の意を表したい。

実際その悲報は全く予期せぬものであった。筆者はEboとの共同研究の打ち合わせを兼ねて6月にアリゾナ、フェニックスで開かれた国際鳥類内分泌シンポジウム、同月カナダ、ウィスラーで開かれたSRBRに出席したが、その時の彼の様子は普段と全く変わらず、健康そのもののように見受けられた。アリゾナの宿泊先のホテルのプールでは元気に泳いでいるところも見かけている。それ故、その悲報はまさに青天の霹靂であった。聞くところによると、SRBRから帰国後腎臓に癌が見つかり、それは肺にまで転移していたようで、ただちに手術をしたが数日後に病院で逝去されたそうである。

Eboは鳥類の生物リズムの研究で知られるが、とくに概年リズムの研究に関しては右に出る研究者はいない。彼は行動学の分野でノーベル生理学賞を受賞したLorenzと太陽コンパスと鳥の渡りの研究で著名なKramerの指導を受けて研究をスタートさせた。その後生物リズムの泰斗Aschoffの下で研究を重ね、マックスプランク行動生理学研究所（当時）の所長となった。筆者は1990年に当研究所に滞在し、Eboと共同研究を実施したが、ここには概年リズム研究のために一定環境下で動物を永続的に飼育できる施設が整備され、経験のある動物飼育スタッフが配置されていた。短期間で成果を挙げることが要求される日本や米国からはおよそかけ離れている研究環境に強い感銘を受けたことを覚えている。Eboはこの研究所で、実に10年の歳月をかけて鳥の一生涯の生殖リズムを記録し、そのリズムがほぼ一年の周期で振動する内因性の概年リズムであることを明らかにした。わずか1サイクルを記録するにも1年を要する概年リズム研究は、現在ではおそらく世界中のどの研究施設でも実施できないであろうし、それに挑戦するだけの十分な時間が研究者に与えられていないであろう。その意味においても、Eboは生物学に偉大な足跡を遺したと言える。今後この遺産を引き継いで発展させることの出来る研究施設と研究者が現れることを期待したいものである。

Eboの研究は概年リズムだけでなく概日リズムにおいても顕著な業績を残している。鳥類の概日リズムの制御システムについて、松果体やメラトニンの役割について多くの成果を挙げており、この分野では常に引用される論文をいくつも執筆している。筆者も鳥類の概日リズムについて研究をしているが、Eboが提案した鳥類概日システムのモデルは今なお重要なモデルとして我々の研究を進展させるために役立っている。

Eboは大変気さくで人間性にあふれ、自然を愛し、研究の原点を自然界の生き物におくフィールドナチュラリストであった。生物学は自然に興味を持ちそれを観察することから始まるが、彼の研究者としての原点はまさに自然の生き物に対する興味であった。



Eboをはさんと吉村、Bartell両博士

アフリカのザイールやタンザニアなどの定点に出かけて鳥類の生態調査を行う息の長い研究を行っている。彼の薫陶を受けて育った研究者は多く、生物リズムを含め鳥類学の分野で大いに活躍している。奥さんのHelgaさんも研究者としてEboと共に働き、3人の子供と5人の孫に恵まれて公私共々研究者としての円熟期を迎えていただけに、返す返すも残念である。写真はウィスラーで開かれたSRBRで年周リズムに関する共同研究の打ち合わせ後に、Paul Bartell博士（Texas A & M University）と吉村崇博士（名古屋大学）と一緒に撮った写真である。これが私とEboとの最後の別れとなってしまった。ご冥福をお祈りし、追悼文としたい。